

留学を終えて

長良高等学校 島崎 拓 (アメリカ合衆国)

人生で初めてアメリカに足を踏み入れてから、早いもので10か月経ちました。もうすぐ僕の留學生活が、幕を閉じようとしています。この一年が、僕の人生の中でも特に素晴らしい一年であったことは、言うまでもありません。アメリカで一年を過ごすということは、自分の慣れていない環境、文化の中で過ごすということであり、また家族、友達とも離れ、いわゆる“コンフォートゾーン”から抜け出した状態での生活でした。当然日本語を使う機会は一切なく、全ての会話が英語で行われます。一年を通して自分が今まで使ってきた言語と違う言語を喋るのは、この一年で一番大きな壁でした。しかし、このような厳しい環境だからこそ、自分を大きく成長させることができたのかもしれない。また違う文化の中で過ごすことにより、今までの自分にはなかった新たな価値観も生まれました。

僕は新しい経験から新しい自分が生まれるかもしれない、と常に心の中で考え、アメリカ留學中には、できるだけ自分が今までしたことのないようなことに、積極的に挑戦しようとしてきました。アメリカには日本にはないものがあり、ここでしか経験できないようなこともありました。そのうちのひとつが、スピーチのクラスです。アメリカではプレゼンテーションやスピーチなど、人前に立って話す機会は多く、スピーチのコンテストや演劇が高校でも盛んに行われていました。僕が通っていたような全校生徒が400人の小さな学校でも、演劇やスピーチの授業を受けることができます。留学生はスピーチのクラスをとって英語に慣れることが大切だ、とスピーチの授業をとることを勧められました。スピーチの授業では上手なスピーチの作り方を学ぶのですが、すべてが英語で行われるので、日本人の僕にはスピーチの原稿を書くだけでも大変な作業でした。そしてその原稿をクラスの前で発表し、先生に評価してもらいます。これを何回も繰り返します。もともと僕は人前で話すことはあまり得意ではなく、正直なところスピーチの授業はあまり好きではありませんでした。しかしそれは他の生徒たちも同じで、喜んで人前に立ち得意気にスピーチをする人はごく僅かでした。アメリカ人は皆スピーチが得意で人前で話したがるものだと思っていましたが、どうやら間違いだったようです。そのため、スピーチに失敗しても絶対に馬鹿にしない、とクラス内で約束がありました。また、自分のスピーチを終えた後に、褒めてもらったりすることもあったので、苦手なスピーチでもかろうじてモチベーションを保つことができました。なにかとうまくいかないこともあったが、少しずつクラスの前でスピーチをするのにも慣れ、努力が報われたかなと一番思える授業でした。

もう一つ刺激的な経験があります。それはスポーツです。無論日本にもスポーツはありますが、アメリカ人のスポーツに対する姿勢は、日本のそれとは大きく違っていました。そしてその姿を見て、僕のスポーツに対する意識も変化しました。アメリカのスポーツには日本でいうところの“練習試合”というものがなく、全ての試合が公式の試合であり、彼らの一つ一つの試合に対する真剣さは

尋常ではありません。試合の日になると、互いの士気を高めあい、ロッカールームには緊張した雰囲気漂います。生徒や保護者達は、まるでプロのチームを応援するかのように、自分たちのチームの名前とロゴの付いたTシャツを着ていました。いざ試合が始まると、会場は選手を応援しに来た保護者や生徒で埋め尽くされていました。点が入るたびに歓声が沸き上がり、ベンチメンバーも自分が点を決めたかのように喜びます。試合に勝てばすぐさま観客は選手のところへ駆けつけてお祭り状態になり、負けると、涙を見せる人もいました。これはどの競技でも同じで、野球、バスケットボール、陸上、ほぼすべてにおいて同じ姿勢が見られました。アメリカンフットボールのコーチが試合前に「これは戦争だ。」と口にすることがありました。物騒な言い方ではありますが、本当に彼らは戦っているようでもありました。日本では部活をする多くの方は、楽しむことや運動不足を解消する目的で行うことが多いと思います。ましてや「戦争だ。」と口にする人なんて、全国を狙う強豪校くらいでしょう。僕もこれほどスポーツに対して真剣になってみたいものだと感じました。

何事も経験とは言いますが、やはり自分の知らないことをやってみるということは、非常に大切なことだと思います。そして若い時だからこそ、挑戦し続けることで将来の幅も広がると思います。僕はこの貴重な経験を活かし、幅広い可能性のある人間になりたいと考えています。

